短歌

○　廣瀬頼一

賤が男のやさし心も見ゆる哉からでのこせし撫子の花
山の端にかたぶく北斗冴え〳〵て子規啼く北溪のさと

○　山内翠光

むらさきの靄をぬけでし郷の九輪てらして入る〻日哉
西せんか東せんかの下京や月ほがらかに笛かすかなり

○　しら梅

我思ひ遠く野に入り夏草の花とも咲かむ君むかふため
悲みの國に咲くべき姿かなうなだれ勝の白ゆりのはな
江にのぞむ家美しき簾して朝をもれ來るたま琴の音や

○　菅原櫻心

相寢せし二人がみ手に掬れて永久につきされ青葉の泉
永劫に冷たかるべき谷かげの石とも見ゆれとある心は

○　磯田良雄

白鳩は暮にかへり來我庭のたけむらしげき綠めぐりて
湯浴して廣庭あゆむ少女子の友染すゞしゆふ月のかげ

○　芳子

柴折戸をさきうづめたる白萩に秋の氣ゆらぐ黄昏の風
大瀧のしぶきにゆれて白百合は清き香はなつ深山谷蔭

○　林靜子

身をかざるみどりの髪はやがて身をいましむる緒としろしめせ君
胸に秘むる緒琴にひゞけ芭蕉葉をすべりて落つる露のしたゝり

○　富美子

露しげき大野の朝をさまよへる少女に匂ふ夏草のはな
おほ夏や湯の香薫ずる谷あひの青葉こかげに鶯を聞く

○　加藤たまも

一ふしの撥の音やみて月さして思ふこと多し湖のょひ
謎めけるあだ文やきて蚊やりして月見る夜なり啼く子規
うつくしき夢くりかへし思ふ戸の伊豫簾もれ來る白蓮の香や

＊　＊　＊　＊　＊　＊

釉香のわか公そぞろ足とめて
一枝たをりぬ河原撫子
秋の夜を虫に閉さぬ草の戸に
ほのめき出でぬ夕月のかげ

＊　＊　＊　＊　＊　＊

○　投稿歡迎　伊勢白子局區内　眞宮宛